資料

リーフマンの價格理論一班並に貨幣の側よりする其變動

經濟理論の使命の一つは現代の交換經濟的機制を統一的組織的に闡明するにある限り、價格の問題は全經濟理論の中核に立つべき權利を有する。而してリーフマンに據れば價格理論の主要なる問題の一は價格構成の究明にあり、即ち如何にして多數人の主觀的欲望から、全然一般的客觀的貨幣表示たる價格が成立つかを說くにある。從て其れには需要の說明、即ち買手の側に於ける價格計算は如何にして行はるゝかに就ての說明と、供給の說明、即ち他人の欲望充足の爲めに如何に費用は振向けられるゝかに就ての說明との二問題を含むであらう。價格理論の主要問題の他の一は價格變動論であつて、價格の變動を釀す諸原因を研究し、之を組織的統一的に叙述すべきにある。之には需要及供給の側よりするものと、貨幣の側よりするものを區別して考ふることを得る。個人的主觀的立場より經濟理論の全般に特異の說を樹立せる彼は、之等の點に就ても亦從來の諸說を排擊しつゝ獨自の理論を展開さしてをる。本篇の第二部として所揭の標題の下に譯出せる所は、同教授が Grundsätze der Volks

wirtschaftslehre, II. Band, 7. Teil, Kap. IV. に Preisveränderungen von der Geldseite として載する所であつて、小畑茂夫君の勞作にかゝる。之に若干の朱を加へ且その前後に拙稿を附錄して茲に寄せたるは、リ教授の特異の說の一般に淺からぬ學問的興味を以て迎へらるべきを惟ふと共に、之を機緣として卑見を述べ批正を仰がむと欲するにある。

叙說の順序として、先づ一、リ教授の價格理論一般を同書所載價格論に據り略述紹介して前置となし、二、次に本篇の主部たる貨幣の側より生ずる價格の變動を叙し、三、最後に之に觸れての私見を述べ度い。

一　リーフマンの價格理論一班

一、價格理論の概說並に其任務
一、價格構成の說明
　需要の說明、供給及競爭價格の說明、全交換取引に於ける交換經濟的限界收益、
　獨占價格の說明並に價格の極限、費用財の價格
一、價格變動の說明
　需要側よりする價格の變動、供給側よりする價格の變動、貨幣側よりする價格の變動

價格は從來の學者の考ふるが如く財の量にあらずして、貨幣表示Goldausdruckである。デイールは價格は或財の引渡に對し反對給付として置かるゝ財の分量なることは、價格論に於ける普通の見解にして、一般に認められ

たる前提なりとしてをる。ボエーム・バヴエルクも交換に當り他の財の或る量を得るの能力之を交換價値と云ひ、價格は此財の分量其れ自體であるとした。之等は財の分量にて表示せられたる關係を觀察し、以て交換過程を說明し得るものと信じたる經濟の數量的唯物的見解の果實に外ならずして、說明すべき概念を尙多く說明を要するものによりて置換へたるに過ぎない。而も一財に他の財の或分量を得べき固有の能力は決して存しない。財が相互に交換せらるゝ分量を觀察するも、價格の成立及び其職能を說明することを得ない。各財の間には何等確定的なる關係は存せざるものにして、存するは唯財に就ての考量のみである。

一般に價格は生產費を以て決定せらるゝとする如き客觀說も、限界效用によりて定まるとする主觀說も、全價格相關の關係を認め得ずして、個々の財の價格が孤立的に他の財より分離して決定せられ得るとするの根本的誤謬に陷つてをり、特に前者に於ては價格を交換當事者の個人的評價に溯源せしむることを得ない。尤も之に不滿を懷ける人々は貨幣を通じて總ての價格が相關關係に立たしめらるゝことを認めて來たが、尙ほ其場合に於ても或人が一の財に對して支拂ふ價格は、其人の評價の客觀的表現なりとする見解が存してをる。例へば或人が一着の外套を五十圓にて購へる場合、そは外套を五十圓に等しと評價せるなりと云ふ。或は又價格を主觀的評價の比例的表示なりとして、例へば或人が或財を二十圓にて、他の財を十圓にて購へる場合、そは前者を後者の二倍の價値ありと評價せるなりと云ふ。然し斯く解する場合に於ては、價格も一般に經濟する場合と同じく、效用と費用との差額たる收益概念に關聯せしめてのみ理解し得ることを考へてゐない。財と財との關係も、財と貨幣との關

係も人及び其欲望を顧みることなしには解し得ずとすることはリ教授の主張である。而して同教授の意味する價格とは交換取引に於て一般的交換手段の單位にて表示せられたる反對給付にして營利經濟に對しては其效用を意味し、消費經濟に對しては（營利經濟に對してもそが買手たる限り）其費用評價（消費經濟にありては心理的なる）の根底を意味すと云ふにある。

價格構成に就ては需要供給を以て說明するもの、最も通說として承認せられ來れるが、種々の財の供給が如何にして生ずるか、又限りなき需要が如何なる範圍に充足せらるゝに止まるかを說明する能はずんば未だ充分でない。フキリツボヴキツチの如きも價格決定の上極限は最後に交換關係に入來る購買者の價値判斷と、交換より排除せられたる販賣者中最も廉く賣らんとする者の價値判斷によりて限られ、下極限は交換關係に入來る販賣者中最低の價格を有つ者の價値判斷と、交換關係より排除せられたる購買者中最高く買はんとせる者の價値判斷によりて局限せらるとした。然し斯る說明を以てしても如何にして價格が成立するかは明かにされない。如何にして或る價値判斷を有する者が最後の購買者として交換關係に入來るか、又何故に交換關係より排除せられたる販賣者中最低の價格を有つ者は賣ることを得ざりしか、從來の價格論は毫も之等の問題に答へない。凡そ之等の現象は費用と效用の關係、收益概念從つて又限界收益均分の法則 Gesetz des Ausgleichs der Grenzerträgge を顧みることによつて、初めて說明せらるべきものであるとすることリ教授の主張である。

價格構成の問題として需要供給の二方面の說明の必要なることは既に叙べたる所なるが、各經濟者は其所得を

費用として總ての欲望に配分し、從前の價格に基きて效用費用の比較を行ふ。從つて彼等が從前の價格を知ると充分なるに從ひ、また價格變動の虞少きに從ひ、其經濟計畫は正確となり、之等の不確實なるに從ひて、重要なる欲望に對して比較的大なる所得部分を備へ、重要少きものを斷念せざるべからざることゝなる。各經濟者は收益を最大ならしむる爲めに限界收益を均等ならしめ、貨幣を以て計算せられたる一定の費用を持して市場に現はる。斯く算當せられたる費用が需要となるのであつて、需要とは即ち交換取引に參與する經濟者が彼の經濟計畫に於て計算したる、一定の財を調達する爲めの費用評價の總體なりと云ふことを得る。

然らば此の需要に對しては如何にして供給が行はるゝか、供給の說明は分れて二となる。其一は供給の發生、換言すれば營利活動は如何に各種の營利部門に配分され向けらるゝかの問題であり、其二は供給の範圍、即ち無限の需要に對して何故に一定の限度に於てのみ供給せらるゝかの問題である。此兩つが最完全に問題となるは、供給せらるゝ財が任意に增加せらるべきものであり、且つ多數人に依りて供給せらるべき可能性ある場合、即ち自由競爭の行はるゝ場合である。云ふ迄もなく獨占價格の場合たると競爭價格の場合たるとを問はず、其供給に對して決定的地位を占むるものは收益である。供給即ち交換取引に於ける各種財に對する費用の配分に就ても、消費經濟內に於て費用の配分を決定すると同樣に、限界收益均分の法則に從ひて收益を最大ならしめむとせられる。即ち供給者は各營利部門に於ける限界收益が均等なる程度に於て供給を行ふ。この限界營利收益 Grenzertrag を稱して交換經濟的限界收益 tauschwirtschaftlicher Grenzertrag と呼ぶ。

此交換經濟的限界收益は各種の營利部門に於て種々の形式をとりて現はる。先づ勞銀に就て見れば、一國民の總文化狀態に應じたる生活を營むに必要なる最小生活費は、其以下にては引續き勞働の供給せられざる限界を構成する。故に不熟練勞働者の勞銀は交換經濟的限界收益である。次に貸付資本收益即ち利子に就て觀れば、費用財たる資本も亦或程度の收益の得らるゝ限に於て投下せらるゝ。貸付資本に對する其地通常の利率は、即ち限界資本收益の最見易き形式であつて、それ以下なる時は所得は資本に向けらるゝことなく他に轉向せらるゝであらう。更に企業利潤に於ける交換經濟的限界收益を觀るも、其以下にては引續き資本の投ぜらるゝことなかるべき最低限が存する。固と資本は最大の收益の得らるべき方向に流る。之を理論的に云表はせるもの即ち限界收益均分の法則である。之等各種の限界營利收益間には、相互に關係の存するものにして、就中一般利率と最低企業利潤との間に均等の傾向存することは明かである。何となれば資本家は其節約したる所得部分を貸付くべきか、企業に投ずべきかを任意に決定し得るが故である。而も此兩者と限界勞働收益との間にも亦均等の傾向が存する、蓋し企業者が引續き高き利潤を得る場合には、勞銀も騰貴するを常とするが故である。

價格を決定するものは從來考へられたる如き需要供給にはあらず。以上の交換經濟的限界收益が均分の法則に從つて費さるべき費用を決定し、從て供給及び價格を決定する。若し之が得られざる時は資本及勞働は他の營利部門に向けらるゝであらう。交換經濟的限界收益も效用と費用との差額たるの點に於て、他の收益と異らず。此場合に於ける效用は營利經濟が獲得する總利潤にして、消費者より出で消費者の支拂ひ得る所より出づる。然乍

ら價格は任意の個々の消費者の費用に從屬するものではない、限界消費者、即ち辛じて其所得の中より斯る貨幣額を其財の調達の爲めに使用し得る消費者の費用評價である。即ち彼は其財を購ふに當りて限界收益均分の法則に從ひ、辛じて限界消費收益 Grenzkonsumettrag を獲得し得る消費者である。限界消費者がその限界消費收益によりて價格を支配することは、供給の側に於て交換經濟的限界收益たる最小收益を得る限界供給に於けると同樣である。而して如何にして價格が限界消費者の效用評價と、交換經濟的限界收益とに由り決定せらるゝかは、次の獨占價格の說明に於て最も明かに示さるゝ。

獨占者は供給の範圍を確定し、而も一方的に價格を決定し得るものにして、最大收益追求の努力に依りて之を決する。然るに收益の高さ從て又價格の高さに對し決定的の重要さを有するものは、消費者の效用評價、並に彼が之を貨幣所得に照して考ふることである。獨占者が可能的大なる總收益を獲得すべきことを考量に入れて、その價格を要求し能ふ限界は何れにありやと云ふに、其限界は獨占者が最大の總收益を獲能ふ價格にて其財を購ひ、尙且つ個人的限界消費收益を獲得し得る限界消費者の限界消費收益である。今限界消費者が其財の最終單位より得る效用を限界效用と呼ぶならば、獨占價格の上極限は限界效用マイナス限界消費者の得る限界消費收益によりて表はさる。(玆に注意すべきことはリーフマンの所謂限界效用は限界效用論者の云ふ所の限界效用とは著く異なる。即ち後者の意味する所は與へられたる財量の最終單位の效用なれども、玆に云ふところは限界收益を得能ふ限界消費者の有つ效用である。) 然乍ら此場合何人が限界消費者たるべきかは獨占者が其供給に依り、其最大收

益追求の努力に依りて決する。斯くして獨占價格は其上極限を供給の側に於ては競爭價格の場合の如く、最小營利收益たる交換經濟的限界收益に依て決定せられずして Maximalprinzip により最大收益追求の努力に依て決定せらるゝ。

而して獨占價格の高さも亦競爭價格の場合と仝じく、他の價格と關係的に決定せらるべきものにして、競爭價格の場合に於ては斯かる全價格相關の關係は交換經濟的限界收益に依るに反し、獨占價格の場合には此の關係は需要を通じ、需要者の費用に依らねばならぬ。其故は獨占價格の引上げらるゝ時は、消費者の多數は其經濟計畫に基きて其に對する費用の割當を止め、從つて獨占者の總收益の減少を促すに至るが爲めである。各消費者の限界消費收益が交換經濟的限界收益以下に下る時は、彼等は之を購はずして其所得部分を節約して資本たらしめ、以て交換經濟的收益を獲得せんとするであらう。最終消費者は限界消費收益の獲得と、交換經濟的限界收益の獲得從つて消費と資本構成との間を彷徨する者である。

斯く最終消費者の限界消費收益を交換經濟的限界收益と同視することによつて、獨占價格の限界を更に一般的に表示することを得る。其の下極限は競爭價格が原則として接近する所にして、限界費用プラス交換經濟的限界收益として表すを得べく、その上極限は絕對的獨占價格の接近する所であつて、限界效用マイナス交換經濟的限界收益として表すことを得る。自然そは一般的に價格の理論上の極限である。斯くして收益概念に限界及均分の考へを應用することに依り、別言すれば限界收益均分の法則を以て、價格の決定を事實上效用及び費用に導き、

以て全く主觀的なる概念より價格の構成を説明すべき、一見不可能なる問題を解決したとリーフマンは高調してをる。

上に叙べたる價格の極限に就ての考察は、價格と租稅との關係を考ふる場合一層興味あるものとなり、此點にも又リ教授特異の見解が存してをる。通說に據れば買手は獨占者に對しては平常弱者の地位に立ち、引上げられたる租稅を負擔せざる可からずとする。然れども氏の說よりすれば、既に其の優越的地位を利用して獨占的收益を獲得せる獨占者は、買手を其の個人的限界收益に追迫せるが故に、其上價格を引上ぐるの餘地なく自ら引上げられたる租稅を負擔せざる可らざることゝなる。又財の供給過大にして賣手は烈しき競爭に立つ場合、從來の說を以てすれば賣手は弱者として引上げられたる租稅を負擔するとなす。然れど此場合に於てもリ氏の說に據れば買ふことを希望せる人々が新稅を負擔せざるべからざるに至る。蓋し賣手の大部分は既に交換經濟的限界收益を得るに止まるが故に、之以上或ものを負擔して其收益を減ずることを得ざるを以てゞある。特に其が殆ど同樣の費用を以て總ての賣手に依りて供給せらるゝ普通財、多量財の場合に於て然りである。

價格構成の說明を終るに當りて仝じくリ教授說の興味ある部分として附說すべきことは、費用財の價格に關してゞある。從來の價格理論は何れも費用財の價格の本質的說明たり得ない。費用財の價格構成及び其供給に對しても亦、享樂財に就て叙べたると仝樣の根本理論の適用せらるべきものである。即ち其價格は交換經濟的限界收益に依りて決定せらるべく、今日の分業組織の下に於ては經濟者は販賣によりて得る營利收益が、少くとも交換

經濟的限界收益に等しき限に於てのみ、費用財の調達に其資本と勞力とを用ゆる。交換經濟的限界收益を得べき享樂財最終賣主の費用は、彼の使用せる費用財全部の價格に等し、即ち彼は之等費用財の消費者として收益追求の努力により、其價格の上極限を定むることは、恰も交換經濟的限界收益を得べき最終消費者が享樂財に就て之を決定したると異らない。此場合に於ても亦價格の極限は個人的限界效用マナイス交換經濟的限界收益、及び限界費用プラス交換經濟的限界收益として示すことを得と云ふ。

價格理論の第二の問題たる價格の變動に就て觀れば、之は種々なる原因より惹起され得べく、之を需要側より生ずるもの、供給側より生ずるもの及び貨幣側より起るものに區別するを得れども、之等は相互に錯綜して起るものなること言を俟たず。從來其何れの方面を力說するものも存し、生產費說、需要供給說、貨幣數量說と云ふが如き是れである。特に貨幣數量の價格に及ぼす影響は重視せられて通說となり、更に之を嚴格に云表はすに及むで、價格の騰貴は貨幣數量の增加に比例すと論ぜらるゝに至つた。然し其間の相互關係に就ては何等科學的基礎付けが行はれ得なかつた。オトマー・シュパンは稍趣を異にする價格變動論を打立て、多數商品の下落する時は必ず他商品の騰貴が惹起せらるべしとした。斯くて全價格相關の關係は認められしも、ス氏のなせる如く所得の變動を伴ふことなくして價格の變動行はるとなす假定は固より不可能の事にして、即ち價格の變動を促す原因は同時に又所得の變動を惹起するものである。價格の變動は貨幣、價格及び所得の三者を密接なる關係に立たしむる、完全したる經濟學說の體系內に於てのみ闡明され得るとすることり教授の主張である。

先づ需要及び供給の側より生ずる價格の變動を研究するには、種々なる交換上の地位を競爭、獨占並に其中間帶の三者に區別して考ふるを適當とする。獨占者が生產費の增加をば、彼が一方的に決定し得ると見ゆる價格の中に實際に現はすや否やは、彼の收益に依繫することにして、費用增加に應ずるだけ價格を引上ぐるも販路を減ずる時は、何等自らに取りて得るところなき事となる。反對に生產費の減少せる場合には、獨占者はその低減せる費用を價格の中に現はさゞるを得れども、此場合如何になすやは彼がその生產物の價格を安からしむるも、販路の擴張に由る收益の增加が得らるゝや否やの事實に依繫する。自由競爭の場合にありては費用の增加は通常完全に價格の中に現はれる。何となれば價格は此場合、限界費用プラス交換經濟的限界收益にして、從つて費用の低減あるにあらざれば其以下に低減し得ざるものなるが故である。又費用の增減を考ふるに當りて最も問題となることは、そが總ての供給者に就いて現はるゝか、或は單に個々の供給者の上に現はるゝに過ぎざるかの事實にある。

需要側よりする價格の變動に就て特に注意を喚ぶものは、人口の增加である。人口の增加は需要の增加を釀成すれども、反對に勞働力の供給增加をも伴ふ。然乍ら大體に於て人口の增加は物價騰貴の原因たること疑なき所にして、特に增加せる人口を給養すること、費用の增加に依てのみ可能なる大都市に於ける場合は然うである。又新たなる欲望の發生も大概ね價格の騰貴を齎すべく、流行の影響に依て起る欲望方向の移動に就いても、大抵の場合その價格に影響を及ぼせども、一般的に觀れば其意義は比較的小である。

供給の側より生ずる價格の變動に就て、先づ考量に入來るものは費用の增加である。之に就ては就中純技術的なる土地收獲遞減の法則が、啻に農產物に就てのみならず、住宅其他の用地としての土地に就ても行はれ騰貴的作用を釀す。（尤も現時大都市に於て地價並に家屋の價格高きは賃貸料高き爲めにして其原因ではないとり氏は附說してをる）次に費用の低減に就て其主要なる場合は、最も廣き意味に於ける技術の進步である。然乍ら斯くして多數の財に就て得られたる費用の減少に由て、他の有ゆる財の價格は騰貴せしめられたりとなし、而も之に由つて戰前に惹起され來つた物價騰貴を說明し得とするシュパンの主張に對しては、リーフマンは次の諸原因より反對を唱へ、而も之に依て費用低減なる現象が何等一般的、普遍的影響を及ぼすべき勢力を有せざることを知り得と論じてをる。即ち其理由とする所を摘記せば、一、或る種の財の價格の下落に由て節約されたる所得部分は、有ゆる他種の財に配分せらるゝが爲め、總ての價格の上には何等認むるに足る影響を及ぼさない。二、價格の下落は殆んど規則的に販路の擴張を促し、從つて買手は嬉くして節約さるゝに至れる全所得部分を餘餘の財の需要に向けない。三、絕えず發生する新しき諸欲望は、多數の財の價格低減に由り節約されし所得を相殺する。四、費用の減少は原則として直ちに營利的活動の全部に普及し行はるゝものにあらず、特に其中の或生產者の所得增加を齎し、斯くて價格騰貴の作用をも及ぼすに至る。五、斯かる所得增加の大部分及び節約せられし所得は、資本構成にも向けられる、と云ふにある。之等の主張に對しては固より吟味を加ふべき餘地大なれども、今は單にそを紹介するに止めて叙說の筆を進め度い。

リーフマン教授の價格の構成並に其變動に就いての所說の概概は、以上順を追ひ說き進めて來た。而して今一つ殘されたるものは貨幣の側より生ずる價格變動にして、次に紹介するものは即ち其全班であり、以上の所說に續いてリ教授の價格論の終末を飾る一節である。（高垣寅次郎）

二　貨幣の側より生する價格の變動

一、貨幣增加と物價騰貴に關する從來の見解に對する批評
一、貨幣增加の物價騰貴に作用する眞相
一、現實的貨幣の增加と物價騰貴
一、インフラチオンの意義
一、信用膨脹と物價騰貴
一、インフラチオンと對外爲替相場
一、貨幣政策

貨幣側よりする價格變動の問題は、極めて大なる實踐的重要義を有する爲に、貨幣論上並びに全經濟理論上の一主要問題である。此の問題は戰前最近數十年間は多數の國に於ける貨幣政策の確固たりし結果略ぼ平靜に歸して居たが、最近再び舊の如き重要義を有するに到り、且つ此問題の取扱の不完全なることが茲に再び明白地に示さるゝに到り、從來の經濟學說の全く無能無力なることを曝露するに到つた。全ての唯物的經濟觀、並びに之と關聯せる現實的支拂手段のみを專らとする考察の爲に、最近に到る迄人々は常に唯々現實的素材的意味に於ける貨幣增加の現象のみにその注意を拂つて居たのであつた。然し吾人は貨幣を抽象的なる計算單位なりとする見解を持するものなるが故に、此の貨幣增加の問題が現實的意味にのみ限定せらるべきものに非ざる事を充分知悉

して居る。然も此の現實的貨幣量の增加が物價に及ぼす影響すらも、未だ尙ほその研究は頗る不完全なものである。同時にまた從來眞正の價格理論の缺如せる爲め、抑々增加したる貨幣は如何なる理由で如何にして且つ如何なる方法に於て物價騰貴を惹起するものなりや、と云ふ問題に對しては人々は何等更に詳細なる研究を遂げ得なかつたのであつた。此の點に關する余の主張の謬ならざることを見出さんとせば、須らく貨幣問題に關する最近の大著、即ちかの折衷論者たるヘルフェリッヒの價値ある意見を集めた著書、乃至は此の問題を最も徹底的に取扱て居るアービング、フキッシアーの著書を比較參照せられたい。固より此等の著書は極めて常套的なる「國民經濟的考察方法」よりのみ此の問題を取扱て居るに過ぎないが、凡そ此問題の解決は個人的考察方法に依てのみ可能である。

大抵の場合人々は、貨幣量の增加は機械的に且つ自働的に物價を騰貴せしむるものであるかの如く考へて居る。人々は經驗に由て、甚だしき紙幣增加が常に不幸なる經濟狀態、殊に著しき物價騰貴を惹起するものなることを確信するに到つた、且つその反面に於て、支拂手段を無制限的に增加するを得ざる貴金屬に結びつけることが、有害なる貨幣增加に對する防衛手段であると云ふ事を純經驗的に認識した、且つ又同樣に純經驗的に、紙的支拂手段に關して世人に普く知られて居る兌換準備規定なるものを施行するに到つたのであつた。然乍ら未だ曾て何人も、貨幣增加が物價騰貴を惹起するに到る交換經濟的過程を充分明瞭に了解することが出來なかつた。之れ蓋し彼等が國民經濟的考察方法よりして常に財の量と貨幣量とを相對立せしめ、從て各個經濟內に於ける諸々

の過程に遡らざりし爲である。數量說に就ては既に述べた所であるが、彼等は此說が自然法則であるかの如く考へて居る。彼等は常に、全國民經濟內に於ける貨幣の「購買力」なるものを考察し、其が一般に測定され得るものなりと信じて居た、從て貨幣の購買力が元來凡ての財に對し各人に對して夫々相異つて居るものなる事を悟らなかつたのであつた。彼等は、物價騰貴が由て惹起さるゝに至る交換經濟的過程を更に詳細に究むることを必要なりと考へて居らなかつた。此ことは「貨幣の購買力」に關するアービング、フヰッシアーの大著が明かに示して居る所である。此書は、此問題に關して從來行はれた諸研究の成果であつて、而もそれら諸研究を更に擴張せんと努めたものである。

固より嘗て說明せられた最も普通の意味に於ける數量說も誤ではないが、然し此說は事實上たゞ個々の消費經濟の內部に於てのみ當て篏り得るものであつて而も斯の說が意味する所は、凡そ人が貨幣換言すれば所得をより多く處分し得るに到れば到る程、益々各個の欲望充足の爲により多くを費消し得るに到ると云ふ事に外ならない。然乍ら此の場合その比例的關係に就ては既に問題外である、蓋し欲望は如何なる場合と雖も斷じて測定され得ざるものであり且つ又斷じて外的に表現せられ得ざるものなるが故である。全交換取引とその際費消される貨幣量、即ち此れに數量說が適用されるべき筈であるが、此の兩者に就ては次の如く云ふことが出來る。即ち此の貨幣量、若くは此と極めて曖昧な概念たる流通速度との相乘積たる貨幣量が、財を購ふのではなくして、却て所得即ち貨幣量に非ずして抽象的な計算單位たる馬克で表現され而も個人的に評價せられる大さが財を購ふのである

と。

然乍ら貨幣增加が物價に及ぼす影響に就ては、此を以てしては未だ何ものも說明されてゐない。吾人は此の問題に就ても亦、貨幣增加の影響を先づ個人經濟的に考察する場合、即ちそれを個々の經濟に關聯せしめて考察する場合にのみ、之を明かならしめる得るのである。その場合貨幣增加が物價に及ぼす影響は唯收益と所得とを通してのみ行はれ得るものなることが明かとなる。凡て貨幣の增加は必らず收益と所得との增加を喚起し、斯くして初めて物價騰貴を惹起する。此のことからしても物價を以て貨幣の「購買力」の客觀的表現なりと考へ得ないこと、明かである。蓋し貨幣の「購買力」とは、吾人の知れるが如く決して一般的普遍的なものではなく、各人にとつて夫々相異るものなるが故である。即ち先づ財を購ふものは貨幣にあらずして所得なるが故に、貨幣の「購買力」は人々の所得に應じて夫々異つて居る、然も亦各人はその購ふ所の財を夫々相異つて評價するものなるが故である。

然乍ら次の樣な質問を起す人があるであらう、即ち本來存在せざる貨幣の「購買力」に就てはともかく、吾々は多數の若くは殆んど凡ての商品の價格が騰貴して居る增合に、貨幣の「購買力」の一般的變動が生じたと云ひ得ないのであらうかと。即ち一商品の價格が騰貴した場合、此の價格騰貴はその商品を購ふ全ての人にとつて、その所得從て又貨幣の先づ當該商品に對する購買力の變動を意味して居り、然も亦理論的に云へば、それと同時に爾餘の商品に對する購買力の變動を意味して居る。一商品が騰貴すれば、經濟者は凡ゆる他の商品に對してよ

り少なき餘剰額を持つ事となる。其の場合一般的に、貨幣の購買力が變動したと云へないか。

讀者願くは、斯の說の中に潛伏せる缺點否陷穽とも云ひ得べき缺點を觀破せられたい。所得の購買力は貨幣の購買力ではない。前者は個人的のものを意味する、何となれば所得は人々に依て夫々相異つて居るからである。而て右の如く所得が各々相異つて居ると云ふ理由、並びに各人に就てその欲望と利用費用比較の結果とが各々相異つて居ると云ふ理由からして、ある一財の價格は各人にとつて夫々相異つたものを意味して居る。從て購買力と云ふ代りに所得の評價乃至は計算單位の評價と云ふ方が、より一層適切であり、又かく云ふ場合にはその主觀的な性質が誤解される虞がない。然るに貨幣の購買力とは存在せざる客觀的絕對的購買力を意味する。而も又貨幣增加の際に全ての價格が騰貴しても、此等全ての價格は決して貨幣の購買力の表現ではない、何となれば全ての價格が均等に騰貴する事はあり得ないものなるが故である。從て物價を貨幣の購買力の客觀的表現であるとする事は正しくない、寧ろ吾人は物價變動と云ふ事實をも亦常に個人的に考察し、個々の經濟者の所得と關聯せしめて論ずべきである。常に見る如く好んで用ひられる「國民經濟的考察方法」に順つて、價格及び價格變動を個別經濟の所得に關聯せしめないで、全國民經濟內の貨幣量に關聯せしむることは、大なる誤謬に導くものである。そは數量的唯物的國民經濟學說の爲であり、之が貨幣の購買力に關して行はれた從來の諸論說中に最大の誤謬を宿らしむるに到つた。吾人は今貨幣の購買力なるものの存在せざる事を知て居る、蓋しその理由は簡單であつて財を購ふものは貨幣ではなく所得なるが故である。此の所得を通して諸々の貨幣交換過程は欲望——之が問題

であつて、「財」は問題にはならない――と關聯するに到る。此欲望からしてまた個人的に、凡ての貨幣現象を闡明すべきである。

扨て今次の世界大戰中に於けるが如く、多數の若くは一切の價格が騰貴したる場合、貨幣の購買力又は強ひて不明瞭な言を以てすれば――多くの人々は現に尙ほ愛好せらるゝ價値概念を拋棄し得ざるものゝ如く思はるゝが――貨幣の「價値」が下落したと云ふ事は、一見極めて明白な言の如く思はれる。然乍ら之は動もすれば吾人をして、全ての價格の變動に對する普遍的綜合的な表現が存在するかの如き感を抱かしむるに到るものである。而して斯く一切の價格が騰貴したる場合には右の普遍的綜合的表現を以てすれば、貨幣の購買力の減少てふ形で表明される筈である。然し斯る事は到底存在し得ない。その理由に就ては此處では單に「貨幣論」(原論第二卷貨幣論抽象的計算單位の評價)で述べた所を擧示するに止めて置く。如何なる場合に於ても、即ち物價變動が貨幣側からのみ發生し且つ一切の欲望と費用の費消とが以前と均しい場合に於ても、價格は全然相異つて變動するのである。蓋し其の所以は、極めて多數の價格殊に勞働給付の價格が比較的長期間に亙て確定的に條件づけられてゐるが故である。從て貨幣增加は以下尙ほ說明する如く、必らず極めて相異つた程度に於て騰貴する如く價格從つて所得に作用するのである。貨幣の購買力が下落したと主張する事は、それ故に實際に於ては一群の價格から導き出された極めて淺薄な平均判斷に過ぎない。此の淺薄な平均判斷たる所謂指數を統計的に醇化し、且つ斯くして得られた指數の方法に依て更に或程度迄各種生產物の賣買せられる範圍をも捕へようとする試みが行はれた。然

乍ら斯く比較的小數の財の價格に就て行はれる平均的計算は、決して全ての價格の變動に對する眞正の表現ではない、殊に之は統計的に把捉された數個の財の價格が騰貴したことを示すとしても、無數の爾餘の財及び給付の價格が果して下落して居ないか否かと云ふ事に就いては、何物をも語つて居ない。要之、指數統計は元より物價の變遷推移を表明するものとしては大體に於て全く無價値なりとは云へないが、由來貨幣の「購買力」に對しては如何なる一般的普遍的表現も存在しない。結局又財と貨幣とは自づと賣買取引が行はれるのではなく、特定人並びにその特殊の考慮に支配せられて行はるゝものなるが故である。

貨幣の購買力並びにその變動に就て絕對的な立言をなす事は、之れ財量と貨幣量とを常套的に對立せしむる爲に起るのであつて、且つ個々の經濟者に對する關係を度外視するに由來するものである。其結果は貨幣の增加が個別經濟を通してのみ働くことを明かにするを得なかつた。

扨て吾人は先づ現實の貨幣量增加の作用を考察するであらう。その主要なる場合はよく知らるゝ如く、紙幣並びに銀行券の甚だしく增加せらるる場合である。此等の增加は元より自働的に影響を及ぼして物價の騰貴を齎すものではない。即ち國家が紙幣印刷機を運轉せしむる場合に、例へば國家貨幣に對する信認が自働的に且つ累進的に下落する結果その相場が漸次低落するに到るのではない——此の場合の事柄は從來右の如く考へられて居た——。否却て貨幣增加は、消費の爲に費消せられ得る所得の急激なる增加を通してのみ、その影響を及ぼすのである。即ち先づ其紙幣を以て、需要の支拂をなす國家の所得、次いでは國家が其人から例へば戰時中の如く以前

より一層高價なる値を拂て購入しなければならない人々の所得の急激なる增加を通してのみ、物價に影響を及ぼすのである。若しその場合國家が從來の私的需要のみでは到底補はれざる全く新なる欲望を以て現れ來り、例へば戰時中に於ける大砲、彈藥、車輛、馬匹、自働車等の如きものに對する欲望の場合の如くに、その充足の爲には生產業と商業とが先づ以て準備せられねばならぬ樣な、全然新規な欲望であればある程、益々貨幣增加に由て人爲的に造り出された購買力が物價騰貴を惹起する危險は大である。又その場合にはそれと同時に、多種の原料品若くは勞働力が窮乏を告げる事となり、爲に物價は當然の成り行として更に一層多く而も一層速く騰貴するに到る。それ故に戰時中の物價騰貴は、その何れの部分が貨幣增加に由來し、又何れの部分が商品及び勞働の欠乏に由來するものなるかは、到底斷定し得べくもない。

從て紙幣發行に由る所得の人爲的增加の作用は、その新所得が規則的な交換取引に基かずして發生したと云ふこと、即ちそれが全賣買取引の埒內で既に計算せられて居る交換取引上の給付に基いて起つた收益でない、と云ふ事に歸する。此の新所得は寧ろ從來の價格體系及び所得體系の埒外から發生したものである、即ち換言すれば若しそれが著しい範圍に出現する場合には、遂には傳來の價格體系及び所得體系の均衡を破壞するに到るべき、人爲的に造り出された附加的な購買力である。

貨幣の增加はそれが先づ國家に於て人爲的に造り出された而も交換取引に基かずして發生したる所得を意味することに由てのみ物價に作用する。國家の場合にはそは租稅及び公債の如く私的所得から或は又營利歲入の如く

交換取引に於ける給付から生じたものではなくて、却て國家自らが人爲的に造り出したものであり、且つ爾餘の歳人に加えられて其の經濟計畫を變更せしむるに到る所の所得である。國家はその時從つて財及び給付を結局高い價格にて購入しなければならぬこととゝなるが、其高い價格を受取る人々は以前より大なる所得を獲得し、從て新しき購買力と新しき欲望とを持して流通場裡に現はれて來る。斯の如くして漸次多數の價格が騰貴するに到るのであるが、然し決して全ての價格が騰貴するのではなく又其等が均等に騰貴するのでもない。所得の增加なくして尙ほ各個の商品の價格騰貴の起り得るは、唯々他商品の價格が下落することに由てのみである。即ちその場合には、例へば費用の變動乃至は欲望の方向の變動に關聯する所得の移動が起つて來る。然し此の原因からは、一般的物價騰貴即ち總ての所謂價格平準の上昇は不可能である、且つ又個々の商品の價格騰貴のみを看、爾餘の商品の價格下落を看ずして作成せられたる指數は、貨幣、價格及び所得の三者の間に存する關係を示すべき、交換取引に於ける諸々の過程の正しき映像たることを得ない。

貨幣の增加は、國家をも含めた意味に於ける個別經濟を通じ、且つ當該消費經濟の經濟計畫を革新せしむべき人爲的に創造せられた所得增加を通じて作用し得るものなることを明かに悟らざる限り、價格の發展及び貨幣事項に關する理解ありとは云ひ得ない。（今日尙ほ此の點に關して存在する說明の不明瞭なる事に就ては "Geld und Gold" に於て述べた最近の所說よりの引用を參照せられ度い。）

人々は紙幣の發行に由て增加されたる國家の購買力を强ひて所得と呼ばしめ得ることを予に反問するのであら

う。かゝる反對は、余の體系一般に對する理解の貧弱さ、殊に余の學說と思索の步調を共にせず、余の學說の中に深く考へを潛ましめざる事を、明かに示すものである。此命題は、財を購ふものは傳來的な物質的意味に於ける貨幣ではなくして結局所得であると云ふ、他の命題を更に一步進めて適用したものである事は勿論である。若し此の事を認むるならば、物價の變動が所得に關聯して起るものなるは自ら明かとなる。且つ又かゝる認識は、例へば最近の物價變動論にも極めて重大なる意義を有する。所得增加が物價騰貴に對して斯かる一般的重要義を有するが故に、特殊の場合を國家が自らの爲に新たなる附加的な購買力を造り出すと云ふ場合に結びつける事は、極めて合目的な事である。一般的見解に於て觀念せられて居る所得とは、消費資金、即ち貨幣經濟的考察に於ては勿論一定の財量ではなくして、人々が消費の目的に使用處分し得る貨幣量である。定期的なることの考へは實に所得概念の根底に橫はるものなるが、此は餘り嚴格に取らるべきではない。如何なる場合に於ても國家が自らの爲に購買力として造り出すものも亦、財政學上の意味に於てではなくとも吾人が此處に興味を有して居る關係の意味に於て、消費資金であり所得である。

勿論國家のみならず私的發行銀行も亦紙幣發行により、又以下に觀るべきが如く、一般に自らが處分し得る資力以上にその信用を膨張せしむる事に由て、自ら人爲的附加的なる購買力を造り出し、物價騰貴を惹起し得るものなる事をも顧慮しなければならぬ。此の場合その附加的購買力を所得と呼ぶ事は明白なことである。國家の場合にもその附加的購買力は、勿論國家の購買力を通して直ちに私經濟の所得に影響を及ぼし、更に之を通して物

價騰貴を惹起する。予の叙述が理論的關係を明瞭にして居る事は、一點の疑を挾む餘地がない。貨幣側よりする物價變動に對する全考察を通して決定的なものとして一貫されねばならぬ觀點は、貨幣增加は規則的な交換取引に於て獲得せられたる收益の增加と相關聯してのみ行はるゝを要すること之である。此の收益は更に再び所得として働く從て貨幣增加と所得概念との必然的な關係が生ずる。

貨幣が收益のみならず資本及び財產をも體現すること、並びに之を以て各種の財及び給付が購ひ得らるることは確かである。それ故に現實支拂手段の量は、此の方法で行はれる小取引を滿足せしむるに足る程大でなければならない。然乍ら斯る現實的「貨幣の需要」額の全體を測るべき外的標準は存在しない。この現實支拂手段の必要額は常に等しからざるが故に、此の場合若干の伸縮性が必要とされて來る。小取引の爲め斯く伸縮性を有する支拂手段として、銀行券の發行は其目的に合せざるものではない。蓋し取引は本來その使用する支拂手段それ自らを自らの爲に造り出す。然乍ら斯く云ふとき、貨幣需要の僅少なる場合には現實的支拂手段が大部分銀行に復歸するものなりと云ふのではない。支拂手段の突發的急激なる增加、及び時としてその減少も亦、價格構成に對して危險である。然し平常時に於ては、此等急激なる增減を惹起するに到る動機は全く存在しない。

唯然乍ら、現實の支拂手段が時としては財產及び資本の取引をも媒介するが故に、此の現實支拂手段を單に資本價値若くは財產價値の「準備」を基礎として發行する理由ありと信じてはならない。此は土地を準備として銀行券を發行したジョン、ローの時代この方、極めて最近に到る迄無限に頻繁に繰返された誤謬である。蓋しかゝる

誤謬の今日尙ほ行はれ居る所以は、未だ依然として貨幣の眞正の性質、並びにその增加の物價に及ぼす影響に就て明瞭なる觀念を欠如せるが爲である。即ち世界大戰中に於てすら尙ほ――而てそは此の方面に於ける無理解を曝露するものである――帝國政府は獨逸帝國貸付金庫證券の發行を適法なものとして辯明するに當て、「現實の價値」がその根底に横はつて居ると云ふことを以て、その理由とした。かゝる「現實の價値」即ち一般に紙幣の「兌換準備」は紙幣の發行に對しては問題外である。貨幣の發行を一銀行の資產狀態の觀點から判斷すべしとする、余が呼んで以て「銀行的」なりとする斯の貨幣觀は全く誤りである。悲しい事には、之は我が全貨幣制度の根底に横はつて居る見解であり、且つ之を今日明日の中に一掃し去るべくもない。

吾人は今や、支拂手段の發行は資本又は財產客體を基礎として行はるべきではなく、貨幣量の增加は收益の增加並びに精々資本の增加と關聯して行はるゝを要すること、並びにその理由を識て居る。現實の支拂手段は、そが依て以て稱へられて居る抽象的計算單位の利用せらるる場合に比すれば、極めて微々たる役割を演ずるに過ぎざるものであり、小取引分けても享樂財の取引に用ひらるゝに過ぎない。それ故に現實の支拂手段は、抽象的計算單位に依て賣買取引せられる如き種類の財の準備を基礎として、任意に增加せらるべきではない。故に獨逸の貨幣制上極めて樞要の地位にある或人が一九一七年に、今次の世界大戰中に於ける獨逸の紙幣增加はその額二三十億に達したるも、それが物價に對して何等特筆に値する程の影響を及ぼさざりし事は、帝國銀行のみを通しても數千億（一九一八年には二〇〇〇ミリアーデン以上）の賣買取引の行はるるを觀ても明かである、と主張したの

は全然誤りである。之等の資本的取引に於ける賣買取引は全く問題外なのである。凡ての費用財の價格、及び收益價値を體現せる總ての證券の價格は、何れも享樂財の價格からのみ引出されるものである。此の享樂財を購ふものは所得であつて、從て現實の支拂手段の增加は國民經濟內に行はるる全取引額と關聯せしめらるべきではなく、却て四百億乃至五百億馬克と評せらるゝ獨逸經濟生活に於ける年々の收益及所得に關聯せしめらるべきである。兌換準備規定に基いてその發行が何等違法に非ざるものと信ぜられると云ふ理由から、開戰當初の第一週間に於て直ちに廿億馬克と云ふ額の貨幣量が增加せられたが、之が全然無影響に止り得ざるべきは、容易に洞察され得る事である。ましてや一九一八年に於ける約二百億馬克に於てをや。此の點に於ても亦、我が經濟生活の最重要なる基礎に關する無理解が、指導的地位にある人々の間に如何に大なりしかが知らるべく、又經濟學說の缺陷と學問實際の方面に於ける注意の足らざることゝが、如何に玆に悲しむべき結果を齎すに到つたかが知られる。

又國家がその支拂手段を增加する場合にも——此の事は充分力說せられねばならない事である——物價に及ぼす影響は本來は貨幣を通してではなく、商品を通して即ち需要の側からのみ行はれる。即ちより高き所得が以前より强い欲望を伴ふ事となり、從つて多數の財の價格を騰貴せしむるのである。而して貨幣增加に由て起る物價の騰貴は此以外の經路をとることはない。蓋し貨幣は欲望と貨幣にあらざる勞働苦痛乃至は他の財に於ける犧牲たる最終費用とを結びつける全然無關心なる媒介者に過ぎざるが故である。交換取引に於ける一切の變動は何れも皆その根本的因子たる欲望乃至は利用と費用との變動を通してのみ起り得る。此ことは心理的過程としての利

用と費用とを以てその基礎概念として居る心理的經濟學說を以てのみ認識せられ、且つ一貫して闡明され得るものである。

故に貨幣量の減少も亦、從來の學說が信じて居た如くに、それ自ら自働的に物價の下落を齎し得るものではない。却つて反對に、貨幣量が減少するにも拘らず、尙ほ人口の增加並びに富の增加ある場合には多數の價格は騰貴する。かの補助銀貨が輸出された一八九〇年代の伊太利に於ける如く貨幣量が減少した場合、乃至は貨幣量の增加が人口の增加に相應せざる場合には、物價は下落しない。即ち物價騰貴を惹起する他の諸因子は、現實の支拂手段の減少よりも遙かに大なる效果を有するを常とする。吾人の既に熟知せる方法で、取引は自ら貨幣量を超過する現實支拂手段の需要に適應し得るものである。貨幣の減少は所得の減少を結果し得ざる限り、價格の下落を惹起しない、而してそは決して夫々別々に起ることはないであらう。

從つて所得とその急激なる人爲的增加とが問題であつて、賣買取引と關聯せる支拂手段の量は問題でない。支拂手段の量の增加が附加的な所得を人爲的に造り出すに到らずして、たゞ交換取引自身から起り來つた所得及び收益の增加を表現するものであるならば、そは全く物價騰貴を惹起し得ない。他方に於て、既述せる如く貨幣量の增加なくとも所得の變動によつて價格變動は起り得るのである。

夫故に貨幣增加が物價の上に及ぼす作用は、常にその間に一定の比例的關係の存在を信ずる數量說の考ふるが如く、單純に貨幣增加の範圍のみを考察しても明かとはならないのであつて、其の起り來つた事情を顧慮すること

とが必要である。即ち貨幣增加は交換取引の擴張と及其れより生ずる諸收益と相關聯すること直接なればなる程その危險は尠少であると一般的に云ふことを得る。故に金屬貨幣の增加はその危險最も尠少である。然乍ら勿論金屬貨幣の增加が物價に對して全然影響し得ないと云ふのではない――世界戰爭第一年に亞米利加及び中立諸國に於て、貨幣の夥しき流入が如何に總ての價格の騰貴を助長したるかは、吾人の目擊した所である――、然し金は他の商品と同樣に購買されなければならない、即ち國民經濟內で獲得せられたる收益を以て支拂はられねばならない。此點にこそ、價値ありと評定せられたる素材を基礎とする本位制度特有の長所がある、即ち國家にとつて可能なる現實の支拂手段の增加は此場合には費用を要するものであり、從てその增加が純然たる附加的購買力を意味しない。然乍ら他方に於て、現代の貨幣本位制度に結びついて居る自由鑄造制に伴ふ危險が玆に橫はつて居る、即ち金產國就中英國は何時でも任意に多量の金を其本位にて表現されたる一定の價格にて賣却し得ると云ふこと、並びに金產國は常に其現存貨幣量を增大せしめて物價騰貴を惹起し得ると云ふこと是である。蓋し金を購買するに當つては何等かの費用を提供しなければならない、即ち結局は吾人の勞働の生產物を以て支拂はれなければならぬが、斯くして現實の支拂手段が過度に膨張せしめられ、殊に通常銀行券兌換準備規定に基いてその金に對して三倍の銀行券が發行せらるゝが故である。金屬主義を根底とせる從來の貨幣政策の無理解の結果、金本位國は斯くして一種の商品を任意の量だけ一定の價格を以て外國から買取るべき義務を負はされる事となつた、即ち自由鑄造制の布かれて居る場合には英國にとつて極めて有利となる。而も又時としては、物價に何等の影響

及ぼす事なくして三倍の銀行券が發行され得ると信ぜらるゝに到つたのである。

然乍ら此の組織には以前に於ては、我本位制の安定並びに物價の安定を脅す危險は殆んど存しなかつた。蓋し英國が全世界に於ける金に對する渴望を巧に煽ることを知つてゐたからである。我が本位制に於ける他の動因も亦比較的危險でなかつた、即ち善良なる商品手形を基礎とする銀行券の發行之れであつた。蓋しかゝる銀行券の增發は交換取引の增加と從つて又收益の增加と密接なる關係に立て居たと考へられ得たからである。貨幣制度を經濟的諸關係に適合せしめんとする理想、即ちある人々に依て主張された如き「典型的貨幣造出」Klassische Geldschöpfung は斯る秩序の下に於ては實現され得べくもないことは明かである。蓋し何等現實に交換取引場裡の給付を增大する事なくして多數の手形は信用要求の增加に基いて一層活潑に流通し得るが故である。投機的時期にありては一商品は平常時に於けるよりも遙かに多數の人々を經て轉輾し、且つ之に由て生じたる手形增加、之に對して行はるゝ銀行券の增發、並びに之を以て人爲的に造り出さるゝ購買力は、相率いて物價を騰貴せしめ、且つ引いて更に急變を促すべき好況期の膨張を導くに到るのである。從て斯の如くして、投機的危機が「典型的貨幣造出」に由て强められるに到る。

發行銀行に提供せられる手形よりも、一般に銀行預金を貨幣增加の基礎たらしむる方が一層正しいであらう、即ちその增加は支拂手段に對する需要の增加に適合せしめらるゝのである。然し此處には吾人の經濟學說から生ずる實際的政治的結果に就て論じて居るべきでない。從來の學說が頻りと取扱へる「貨幣需要」の問題は、國民

經濟上極めて第二次的な而も小取引に對してのみ意義を有する問題に過ぎない。而して此の小取引は必要なる場合には、緊急貨幣 Notgeld の發行に由てその不足を救濟したことは、吾人が戰時中屢々觀察し得た所であり、且つそは國家が貨幣制度に干渉するほど多くの缺陷を有しなかつた。然し通常取引に用ひらるゝ現實の支拂手段の量は極めて伸縮的にして、その場合何れの國に於ても習慣が極めて重要な役割を演ずるものであり、富の程度の等しい場合に於ても貨幣流通の範圍には著しく差別を生ずる。

然し吾人は此處で此の問題を更に此れ以上詳細に論ずる事は出來ない。吾人の當面の問題は交換取引の機制を極めて一般的に理解するにあるが故に、此處では、貨幣量の增加は交換取引に於ける收益の增加と關聯せざるべからざること、收益及び所得は人爲的に貨幣量の增加に由つて造出さるべきものに非ざることを立證すれば充分である。之は吾人の經濟學說より生ずる實際上極めて重要なる成果の一である。

貨幣の增加が交換取引に於て獲得せられたる收益の增加以上に及ぶ時は、そは直ちに物價の騰貴を惹起せざるを得ない、即ち附加的人爲的なる購買力を造り出し且つ物價騰貴を促す爾餘の諸傾向を强むるに到る。貨幣增加が物價に及ぼす此の影響をインフラチオン Inflation と呼ぶ。此の概念は極めて頻繁に論ぜられた貨幣問題の一にして、且つ今日の經濟學說の立場から取扱はれて居た。即ち唯物的經濟觀の上に立て、人々は此の概念を常に現實の支拂手段のみを通常考察する場合極めて重要な役割を演ずる、「貨幣需要」てふ好んで取扱はるゝ題材と關連せしめて居た。彼等は此の唯物的經濟觀の基礎に立て曰く、凡そインフラチオンとは支拂手段の「過剩なる

増加」を意味するものにして、且つ若し取引が新たに造り出されたる支拂手段を受容れ從てその増加「過剰」ならざる限り、問題たり得ざるものであると。それ故に取分けて人々は今次の世界大戰中莫大なるインキと印刷用インキとを費消して證言して曰く、獨逸に於ても其他の諸國に於ても銀行券の莫大なる増加が行はれたが、之は決してインフラチオンを意味するものではない、何となれば占領地に於ける我が（獨逸の）支拂手段の流通、現金支拂の増加、小取引に於ける多數價格の騰貴等の原因より、取引自らが從來より一層多くの支拂手段を要求するに到れるが故であつて、從て支拂手段の過剰もなく、從てインフラチオンは存在しなかつた、共同團體其他に依て發行せられた多數の緊急貨幣は明かに支拂手段の欠乏を立證するものである、と。彼等は大膽にもかゝる理由からして余に向て、余の貨幣學說は現實の問題を晦澁にするのみであると、非難して憚らなかつた。

吾人の既に述べたる所を以てすれば、此れ以上に詳細に此の種の理論に立ち入るを要しない。戰爭中著しくなつた小取引に於ける支拂手段の需要は、インフラチオンの問題とは全然相關する所はない。此の概念は決して、「過度の貨幣増加」を意味しない。抽象的計算單位を本來の貨幣なりと解する見解を以てすれば自明の事であるが、貨幣需用に對する尺度は存在し得ないものであつて、此は貨幣増加の物價に及ぼす影響の意に外ならない。此の點にこそインフラチオンの概念に就て人々の考ふる諸問題が横はつてゐるのであつて、此に對して最も決定的なるものは、既述せる如く、交換取引に於ける收益に對する貨幣増加の關係である。

然も本來の貨幣とは現實の支拂手段ではなくして抽象的計算單位である。且つ財を購ふものは現實の支拂手

段ではなくして純計算的な收益即ち所得である。果して然者、物價に及ぼす影響が現實支拂手段の增加に由るのみならず、また所得增加を可能ならしむる爾餘の諸過程に由ても齎らさるゝことを認むるは、明白なことではないであらうか。かゝる疑問は從來人々が唯物的貨幣學說及び價格理論の基礎に立つ限り到底起り得ざる所であつた、而して余も亦余の著書 „Geld und Gold" に於ては此の問題をそれが値する程充分に取扱はなかつたのであつた。此のことは其續篇たる Die Geldvermehrung im Weltkriege und die Beseitigung ihrer Folgen, eine Untersuchung zu den Problemen der Uebergangswirtschaft, Stuttgart, 1918 に詳論されてをり、又茲に擧げられたる問題が實際的、政治的方面からも、更につき込んで取扱はれて居る。余の全經濟理論に基いて今次の事が明かとなる、即ち現實の貨幣量の增加なき場合と雖も或事情の下に於ては、必然的に物價の騰貴を惹起すべき、通常の交換取引に基かない人爲的なる所得增加が起り得ること之である。這般の事情は實際經濟生活中に觀取され得る所であつて、此度の世界大戰中には充分の機會が存在して居つた。即ち信用膨張の結果收益に基かざる請求權の增加が交換取引に出現すると云ふ場合之である。

今日信用は既に處分し得る貨幣資本から、授信者が任意に消費になりと又資本構成になりと何れにも費消し得る所得からのみ賦與せられるのではない。却て今日の信用制度の機制の下にあつては、豫め期待せらるゝ收益からも亦信用が賦與さるゝを得、殊に又物財資本は再び貨幣の形式に變換せしむることが出來、且つかゝる貨幣資本を其轉換の起るに先ちて、信用の方法に依つて貸出しする事も可能である。換言すれば信用に由て請求權が人爲

的に新たに造り出され得るのである、少くとも其の請求權が交換取引に於ける賣買及び各種の給付に基いて現實に處分され得るものとなるよりも、若干時日前にそれを先取し且利用することが出來る。即ち信用は既存の貨幣資本を以て賦與さるゝのみならず、同樣に豫め期待せられたる貨幣資本を以ても賦與され得るのである、そは則待せられたる收益より成ることあり、又再び貨幣形態に變換さるべき物財資本若しくは財產より成ることもある。其故に或る意味に於ては、信用に由て資本が人爲的に造り出される。

銀行の當座貸越及び引受信用は斯の場合である。此等は銀行自らの任意に處分し得る資本より出でざる限り、豫期せられ將來實現さるべき其顧客の預金貨幣、乃至はその營利活動に基いて銀行に流入すべき爾餘の收益を基礎として、純計算的に賦與せられるのである。信用が斯く著しく膨大すると云ふ事のみで、物價の騰貴を齎し得るとは、是認する事が出來ない。然乍ら斯くの如きは通常、多數の所得が增加し且つそれ自體價格騰貴を惹起する强い傾向の存する極めて投機的な好景氣の時に於てゞある。又此は信用の膨張を愈々强からしめる事となる。かゝる點にこそ、貨幣の側より國民經濟に恐慌を促進する、最も重要なる因子が存在してをる。

更に大に危惧すべきは、國家が紙幣發行銀行に宛て融通手形を發行する場合であつて、戰時中屢々行れた所である。此の場合信用賦與は何等銀行券の發行を見る事なく、單に振替取引及決濟取引中に請求權を記入することに依て行はれる。斯くして賦與せられた信用は、交換取引に於て獲られたる收益に基くものでもなく、又物財又は財產の貨幣形式に變換せられたるに基くものでもない。否そはたゞ國家に讓渡せられたる、人爲的に造り出さ

れた附加的な購買力に外ならない。國家がそれ自ら尙ほ大なる信認を贏得て居る場合でも、物價に及ぼす影響として決定的な事は、信用が如何なる確實性、如何なる「價値」、換言すれば準備として役立つものに基いて賦與されるかと云ふ事ではなくして、抑々信用が如何なる方法に由て賦與せられるかと云ふ事である。それ故にかゝる信用賦與と雖もその國家の前貸金が、直ちに國民經濟內の收益若しくは處分され得る資本から支拂はれる新租稅若くは公債に由て整理統合せらるゝ時は、比較的危惧すべきものではない。然乍らその場合實際の收益並びに處分し得る貨幣資本が、此の目的に引付けらるゝ可能性少なければ少なき程、その危險は大である。

余はそれ故にクレデイツトインフランチオン若しくはヂロインフランチオン Kreditinflation od. Giro inflation なる概念を採用して居るが、爾來此等の概念は屢々用ひらるゝに至つた。即ち啻に紙幣の增加に由てのみならず又純計算的なる信用支拂の過度の膨張に由ても、同樣に物價の騰貴を齎したところの、交換取引に由來せざる人爲的な收益及び所得の增加が起た事があつた。而もそれは比較的小範圍に於てではあつたが、既に以前に於ても好景氣の際には、即ちそれが貨幣市場に現はれて極めて投機的なりし際には、右の如き場合が實際に存して居たのであつた。然乍ら之を夫々立證する事は不可能である、何となれば如何なる形式に於ける貨幣增加もそれ自ら自働的に物價を騰貴せしむるものではなく、常に所得の增加に由て需要側から作用するものなるが故である。故に好景氣時代に於ける總ての財に對する需要增加が寧ろその原因なるか、若しくはそれ自ら既に甚だしき信用膨張の結果であるかは、之を論證すべくもない。而も又、銀行の報告にその觀點を置いて觀察することは景氣を斡

斷するには最も重要な事であるとしても、之を以て無條件に右の事を明かならしむるを得ない。

今日此クレデイツトインフラチオンは自然、物價騰貴の原因として軍事上必要なる財及び給付に對する國家の強大なる需要と不可分的に結びついて居る。その一部全く新しき種類の生產物に對する國家の莫大なる緊急の需要は、同時に異常に高い價格を許容するに到つた――又軍事行政にありては充分商人的な計算が行はれざりし事に　從來の因襲であつた――從て之が爲に、事實上貨幣形式で處分さるべき且つ新たに形成せられた資本を遙かに超えて信用は膨張せられた。之は正に紙幣發行銀行の機制並にかの貨幣の銀行的見解の爲であつた。即ち之に據れば債務には何等かの方法に於て債權が對立せしめられねばならぬが、こは融通手形の發行に由て最も簡單に且つ無制限になし得る。その結果國家がその購入をなす際に生產者に得せしめたる高き價格と收益とは、更に資本構成に用ひ得る貨幣額をも益々增加せしむることとなり、從て又益々大なる額を戰時公債の方法に依て調達し得せしめたのであつた。

扨てクレデイツトインフラチオンなる思想の普及するに至れるに伴ひ、今日或論者は之を論じつめて、有ゆる大なる信用要求は假令それが公債に依る場合でも、クレデイツトインフラチオン乃至は紙幣增加と同樣に、物價騰貴の影響を及ぼすものであると考へて居るが、之は排斥すべき論である。かゝる主張をなす者は尙ほ、少くとも公債が物貨騰貴に影響を及ぼさゞる限界を說明すべきであるが、此は余が力說する所の規則的なる交換取引に於て獲得せられる收益との關係如何と云ふ觀點に立て初めて可能となる。然し實際上吾人の知る如く、戰時公債

の大部分は原料品、商品及び賃銀に包藏せられたる流通資本から支拂はれたのであつた。此の資本は國家が許容したる高い價格と收益とに基いて益々增大し、その結果愈々巨額の戰時公債が應募せらるゝを得たことは、既に說明した所である。公債に依る信用要求は貨幣側より起る物價變動の原因に屬せざるものであるが、獨逸に於て或る範圍に行はれた如く、公債應募者が戰時公債應募の目的を以て貸付金庫に對する、若くはその他の信用要求により其信用を過度に膨張せしめたる場合は此の限りではない。然らざる限り獨逸に於て募集せられた如き巨額の戰時公債と雖も、その物價騰貴の作用は畢竟するに需要側よりするものであつて、且つそは次の二要因に基く。即ち一には、國家がその購入をなす際に充分商人的な計算を行はずして過度に高い價格と收益とを供給者に許し次いで此等供給者が更に影響を及ぼしたる事に基く。然し二には、國家が要求した信用の大部分が消費信用であつて、その內の大部分が繼續的な利用に堪へ得る且つ收益を生み得る費用財調達の爲に費消せられずして、その生產の爲には生產者が先づその資本の增加を行はざるべからざる如き消費財に對する需要を高めたることに基く。國家は之等の消費信用に對して利子を支拂ふのであるが、余を以てすればこれとても特に著しき物價の騰貴を惹起する要因ではない、蓋し之等の利子はその受領者の購買力として漸次有力なる影響を及ぼすに到るのではあるが、然し此の利子支拂の爲の貨幣は消費經濟の所得より租稅に依て取立てられねばならぬものなるが故である。

獨逸內に於て如何なる範圍迄、商品の缺乏による物價騰貴と相並んで紙幣の增加と信用の擴張とに由るインフラチオンが協働的に作用したるかと云ふことは、元より之を數字的に確定するを得ない。常に實際經濟生活中に

於けるが如く、此の場合にも相互作用が存在して居る。即ち商品の缺乏と、國民經濟を激勵して戰時需要の爲にそれを革新せしむるが爲に國家が支拂はねばならなかつた高き價格との兩者は、相並んで彼等の側に於ける新所得を誘起する事となり、之に由て物價騰貴の勢を益々助長したのであつた。初めは比較的高い價格も止むを得ざる所であつたが、後に至つては國家は物價騰貴の防止の爲めに充分なる努力をなさず、却て貨幣增加と信用擴張とに由て一層物價騰貴の勢を助長した。

尙ほ此處に注意を要するは、獨逸が敵國と反對に外國からの原料品及び商品の輸入を殆んど全く遮斷されたことは財政上決して獨逸の利益ではなかつたと云ふことである。勿論此が爲に獨逸の外國に對する債務は僅少に止つたのではあるが、然し國內の物價騰貴は之が爲に更に甚しかつた。且つ之が爲に他の諸國殊に中立諸國のそれに對する我本位貨幣の相場は著しく害せられたのであつた。我本位貨幣の外國本位貨幣に對する相場が我々と外國との商品取引及び支拂取引の範圍に由てのみ決定せられると考ふることは、全く轉倒してをる。否却て既述せる如く、全世界の物貨は相關係するが故に、國內に於ける多數價格の著しき騰貴は外國に於ける我計算單位の評價に對して、その當時の輸出入と關係なく、その影響を及ぼすものである。之亦その實際的意義極めて重大なるにも拘らず、從來の學說の不完全なりし爲に認められざりし現象の一である。從て世界戰爭中に於ける獨逸本位貨幣相場の不利なる原因に關する無數の全く誤れる判斷も亦、右の事を認め得ずして、大抵之を輸出を超過する夥しい輸入に歸したのであつた。然し國內に於て多數の價格が著しく騰貴し居る際には、國內にてはそれを以て

少く購ひ得るに過ぎざるが故、獨逸に對する請求權は外國に於てそれに應じて低く評價せらるゝことは、容易に洞察さるゝ所である。平常時に於は、獨逸人が外國に有する請求權を以てそれに應じてより多くのものを購ひ得、從てその國の需要を高め以て國内に於ける需要增加を免れ得る事となり、本位貨幣相場の均衡は保持せられて居たのであつた。然るに戰爭中獨逸は外國より多く購ふ事を得ず、持に又外國に向て多くを賣却する事も出來なかつたが故に、獨逸に於ける商品の大缺乏は敵國に於ける如く之を外國よりの供給に由つて充足するを得なかつた。即ち物價は商品の缺乏の爲に逸早く騰貴し、且之に應じて獨逸の本位貨幣相場は、必然的に下落せざるを得なかつた。假令全然輸入をなさざる場合に於ても、獨逸の本位貨幣相場は、僅少の範圍なりとも苟も獨逸に對する請求權の存在したる限り、必らず下落せざるを得なかつた。物價騰貴の國にして若し輸出不能に陷る時は、容易に其國の本位貨幣の相場は下落するに到るであらう。

そは岐論に過ぎない。如何なる程度迄中立國に於ける獨逸の本位貨幣相場の下落がインフラチオンに原因せられをるかは、勿論、インフラチオン一般の作用と同じく、正確に確定する事は出來ない。然乍ら新に巨額の所得の急激に作らるゝこと及び所得の大變動が、均衡ある價格の構成に對して危險なるの事實は、依然として同一であり且つ充分心得て置かねばならぬ。直ちに莫大なる利潤の得らるゝ新殖民地に於て物價の高きは之と關係せるものであり、合衆國の高き物價もその軌を一にする。投機熱旺盛なる場合も亦同樣に、物價騰貴の作用は新所得を通して現はれる。然し價格構成にとつて特に危險なるものは、銀行券若くは紙幣の增發を通して行はれる所得

の人爲的造出である。蓋しかゝる所得の增加は交換取引に基かずして發生し、而もそれが公債に由て整理統合せらるゝ場合にも精々その增加せる所得は將來交換取引より發生する購買力を先取りするものなるが故である。

商品手形を基礎とする銀行券の發行は、元より理想的貨幣制度に非ざるも、尙ほその危險は比較的尠少であるそは銀行券が「準備」を有して居るからではない。國家が尙ほ信用を有する限に於ては、銀行券は依然國庫の手形に由り擔保せられ居るものにして、這は獨逸に於ける公債募集の大なる成果の立證する所である。然し貨幣の「價値」の問題、即ち貨幣增加が物價に及ぼす影響の問題を論ずるに當ては、兌換準備は全く問題とならない。却て善良なる商品手形を基礎とする銀行券の發行が比較的その危險尠少なるの理由は、その發行が唯々制限的にのみ可能であり、且つ割引手形の量が交換取引に於ける收益の增加とある關係に立つと考へらるゝが故である。然し之は部分的にのみ該當する事であり、且つ好景氣時代には商品の調達並びにそれに對する手形の發行は、收益の現實の增加よりも遙かに先立ち得るものなるが故に、紙幣流通を預金の增加に適合せしむる方が一層目的に合するであらう。然し此處には之等凡ての問題の說明に就ては前に引用せる余の著書を擧示するに止めて置かねばならぬ。(Geldvermehrung im Weltkriege und die Beseitigung ihrer Folgen を指す。)

然し戰時中可能的均衡なる價格狀態を維持するが爲には、次の二項が極めて大なる意義を有せしことが認めらるゝ。即ち一方には、國家が紙幣發行銀行に對する要求に由て自ら出來る限り少く信用を造出すること、他方に於ては、國家が常に物價騰貴を齎す所の所得の急激なる變動を一般に防止すること之である。それ故に高率にし

て能ふ限り迅速なる最廣義の戰時利得稅、即ち戰時中增加せる一切の所得を出來る丈け迅速に徵收することが、無條件に必要である。悲しい哉獨逸に於は此の事は、交換取引の最も一般的なる基礎に對する洞察の缺如せるため認められなかつた、即ち戰時利得稅はかの經濟的觀點と全然趣を異にせる社會的觀點よりのみ判斷せられ、且つ極めて不活潑に又殊に緩慢に行はれたのであつた。其他の租稅も亦より速かに且つより廣い範圍に亘つて課せらるべきであり、他方に於て又一層儉約し而も一層商人的なる計算を行ひ且つ必要なる支出を一層巧に統御し以て、確かに戰費は著しく引下げられ得たであらう。此等凡ては行はれず、一九一七年度の戰費は四百億以上に達したるに拘らず、公債に依て得られたる金額は僅かに二百四十億に過ぎず、而も租稅は最早その差額を補ひ得ざる有樣なるが故に、その逃げ道として發行銀行及紙幣印刷機に倚るの舊式手段が採用されねばならなかつたことは、自然怪しむに足らぬ所である。然し人々は國內の價格狀態及び本位貨幣相場の狀態に及ぼす諸々の作用に就て、漸次明かに悟るべきである。而して余は余の學說が獨逸經濟生活上樞要なる地位にある人々の間に交換經濟的機制に對する一層優秀なる智見の普及するに貢獻する所あらん事を期望するものである（小畑茂夫譯）

附言　リーフマンの用語の意味に於ては、物價なる語は斥けらるべきものであらう、何となれば多數の價格を綜合平均して一般的なる物價狀態を抽出することは、淺薄なる平均判斷に外ならぬとして取上げぬからである。從つて其著書の中に單數形名詞 Preis を用ひたるときは之を價格とし、複數形 Preise を用ひたるものは之を諸價格として表はすを正確とするであらう。譯者は概ね前者を價格とし、後者に當るものを物價と譯出してをる。全體を理解する上に於て支障なしと信ずるが故に、其まゝに放任した。特に深き注意を拂はるゝ讀者の爲めに、一言このことを附記する。

三　以上に關聯しての若干の私見

一、抽象的計算單位としての貨幣
一、貨幣の價値並に購買力
一、物價と貨幣の數量及び所得
一、貨幣の發行と信用の許與

個人的主觀的立場よりする、リーフマンの價格構成及び價格變動理論の趣旨は、上述せる所によりて明かにされたりと信ずる。以下之等に含まるゝ若干の問題に觸れての鄙見の一端を陳べて高敎を仰ぎ度い。

先づ初めに當りて讀者の注意を喚起するを必要とするは、リーフマンが從來の諸說とは全く異りて、貨幣を以て抽象的計算單位 abstrakte Rechnungseinheit なりとせる點である。此事實を看過しては凡そ貨幣に關聯しての同氏の論議を正解すべくもあらざれば、暫く此問題に筆を止め其が如何なる結果に導き行くかを考へて見度い。彼は云ふ本來の交換手段は從來の學說が只管に取扱へる如き、國家に依りて作られたる現實の鑄貨乃至は證券にあらずして、却て之等現實支拂手段の基礎たる抽象的計算單位である。經濟主體は之を以て表現せられたる價格及所得を以て計算を行ひ、現實の貨幣個片を用ふるのではない。即ち營利經濟者は之を以て財及勞働給付の買入價格と、販賣價格との兩者を計算し、消費經濟者は其營利活動より得たる所得と、彼が必要とする享樂財の價格

との兩者を計算し、何れも現實の貨幣を以て計算するにあらず。具體的意義に於ける現實の貨幣は、之等の考量の行はるゝ場合全く何等の役割をも演じない。而も又斯かる考量より起る賣買取引に當りてすら、殆んど取るに足らざる僅少の役目を有つに過ぎない。貨幣事項の發展は抽象的私的なる裏書及差引決濟方法に依りて、現實的國家的流通手段を益々廣き範圍に補充する如き方向に進むで行く。此發展は現實の貨幣を全然驅逐するを得ざれども、現實の貨幣の重要さは次第に減じ、特に素材價値を有する貨幣は益々無用のものとなる。從來の貨幣學說に於て貨幣代用物及其他の決濟方法を、單に貨幣の流通速度として考察したことは根本的なる誤謬であつた。抽象的計算單位たることこそ經濟生活上最も重要なる貨幣概念であつて、之に依てのみ初めて交換經濟的現象は正當に理解され得るものなりとする。

凡そ如何なる貨幣學說も通常その時代の經濟生活に現はるゝ貨幣現象を觀察し、得たる所を基礎として貨幣理論に望むを常とするが、リーフマンにありても近時の日常取引に於て、各種の支拂決濟方法の行はるゝこと益々多きを加へ、具體的現實的貨幣の重要さ次第に減ぜられ來れるの事實を觀察し、特に歐洲戰爭により何れの國も貨幣現象に關聯して異常の問題を惹起せるの事實に刺戟せられたるや察知するに難くない。

然ながら以上の考へを、其の原論第二卷に於て貨幣を論ずるに當り、二つの貨幣概念なる一節を設けて次の如く叙べたる所と照合するとき、果して如何なる事柄を示唆せらるゝか。即ち曰く、狹義に於て貨幣とは現實の代替性を有する支拂手段即ち Geldzeichen である、而して之は今日次第に用ゐられざるに至つてをる。廣義に於て

而して前者よりも遙に頻繁に用ひらるゝ（而かも交換經濟的過程の究明に不可缺なる）意味に於ける貨幣とは、一般的交換手段の普及の結果自づと發展し、而も今日一般的交換手段として役立てる一般的抽象的計算單位を云ひ、此計算單位は消費經濟に於ては之を以て一切の費用を計算し、營利經濟に於ては之を以て一切の費用と收益とを計算表示するものであると。此事はリーフマンの貨幣理論に於て、味ふべき極めて大なる意味を有するものである。

惟ふに現代經濟生活上、現實の貨幣個片が次第に其重要さを失ひ、各種の私的支拂手段、決濟方法の使用益々多きを加へ來れるの事實は誠に否定するを得ない。然ながら此事實よりして直ちに抽象的計算單位としての貨幣概念を導出すことには、尙ほ理論上困難を伴はざるか。固よりリーフマンにありては現實の經濟行爲、具象に現はるゝ經濟現象は問題たらず、其内に含まれ其底を流るゝ心理的考量のみが問題となるべきも、斯くすることが經濟現象の全體を統一的に說明するに便なるか。リ氏によりて貨幣と觀らるゝ抽象的計算單位なるものは、實は貨幣的計算の單位であつて、一般的交換手段たるものとは異るものにあらざるか。貨幣を純然たる抽象的觀念と見る說の綻びは、先づ貨幣職能として交換經濟的及び經濟内部的兩方面を分ち擧ぐることの上に見らるゝ。經濟内部に於て効用費用の比較手段、一般的表示者たる職能を盡すものと觀らるゝその貨幣は一個の抽象たり觀念たり得る。然ながら交換經濟的職能を盡すものと觀るその貨幣、即ち一般的交換手段たるものは果して以上と同一意味のものにてあり得るか。通常の意味に於て凡そ交換手段と稱するときは、財の給付に對し反對給付として役

立ち得るものならざる可らず。何人も財の給付に對し單なる觀念を得て滿足すべくもあらず、必ず經濟的支配力を伴ふものでなければならぬ。經濟的支配力の表現たらねばならぬ。單なる抽象的觀念としての食物は我等の胃囊を充たすには遠い。交換現象を理解するに當りて一方には抽象的觀念たる貨幣を、他方には抽象的觀念たる財若くは欲望を對立せしむることを以て足れりとすべきか。

此ことは又リ氏が財を購ふものは貨幣にあらずして、所得なりとせる點を併せ考ふる場合同樣の事實に逢着する。財を購ふとは通常或經濟者が財を提供し、他方が反對給付を提供することを意味す。此場合反對給付としては一定の財若くは經濟的支配力を表現する象徵ありて移轉せらるゝを必要とし、例へ現實には其移轉を見ざるとするも、移轉可能なる事實が存せねばならぬ。所得が財を購ふの源泉となるは事實である、然ながら其所得は象徵に表現せられて交換上に現れ來らねばならぬ。財を購ふものは所得なりと云ふ場合正しきことは、購買力は所得に依りて制約せらると云ふことでなければならぬ。此場合抽象的觀念たる所得と財とを對立することに依りて、何事が敎へらるゝか。貨幣も所得も共に Abstraktum たりとせば、財を購ふものが貨幣なりと云ふも所得なりと云ふも、結局一に歸せねばならぬ、蓋しリーフマンの意味に於て所得とは消費に充當せらるべき貨幣額なるが故である。共が貨幣にあらずして所得なりと云ふとき、貨幣によりては現實的なるを而して所得に依りては抽象的なるものを考へしにあらざるか。

經濟生活上現實の貨幣個片が次第に其重要さを失ひ、特に大規模なる取引に於て然ることは事實なれども、現

に流通し交換手段たる職能を盡しつゝある貨幣を如何に觀るか。如何に主觀的立場よりせる經濟理論に照して、」貨幣は抽象的計算單位なりと說くとも、經濟生活上現實の貨幣の存在する事實は蔽ふことを得ぬ。リーフマンが其の Geld und Gold に於て採れる抽象的一面觀より、Grundläge に示せる抽象的現實的二面の解釋の許容に移り行けるは、其意味深き所でなければならぬ。一を狹義にして稀に用ゐらるゝ意味に於けるものとなし、他を廣義にして廣く用ゐらるゝ意味に於けるものとなすが如きは服し難い、蓋し兩者は單なる用ゐらるゝ範圍の廣狹のみの差ではない。

通說に於て價格とは貨幣量にて表されたる財の交換價値を意味し、物價とは之等各種の財の價格の綜合平均、貨幣の一般的購買力若くは價値の逆として示さるべきものとなせども、是亦リーフマンの極力排擊する所である。其說に依れば貨幣には客觀的一般的なる價値は存せず、各人は所得に應じて異りて之を評價する。貨幣の購買力なる概念に就ても、そは人が其に代えて購ひ得るものを意味し、而かも其財は人により異りて評價せらるゝが故に、個人的主觀的でなければならぬ。此場合貨幣は所得の大小に依るのみならず、其を以て充さるゝ欲望の大小に應じ各人により其購買力を異にし、之に對する比較標準は存しないとする。リーフマンは一般の價値現象に就て所謂主觀的價値のみを觀たるものなれども、一定の時、一定の市場に於ては人によりて異らざる一定の貨幣額を以て支配し得る購買力あり、價格のあることも否定するを得ない。墺太利學派以來價値の主觀性は力說せられ來つて多くの贊同を得た。其等の學說に於ても財の客觀的交換價値即ち購買力と價格とは、勿論精確に同義

語とは認められない。交換に於ける能力と此能力によりて得らるゝ財の分量とは異れども、兩者は不可離のものであり、同樣の法則によりて支配せらるゝ意味に於て、客觀的交換價値をば價格と稱するを許してをる。又客觀的交換價値が主觀的交換價値の客觀的表示なること、或は又價格が主觀的價値の客觀的表示なることを意味しない。客觀的價値は主觀的價値に立脚するものであり、價格は主觀的價値に基きて成立するものなりとの意味に於て、之等を連絡ある一系列に置くものである。貨幣の價値又は購買力なる語を以てしては、個々の經濟者に對して妥當なるもの、又個人的なるものを意味すること能はず、又貨幣自らが財を購ふが如く考へしむる動機を與ふるが故に、之に代えて貨幣の評價 Schätzung なる語を用ふるを可とすとリ氏は力說する。惟ふに名辭を排除することは自由なれども、其は事實そのものを解明することとは同じくない。價値概念に代えて評價概念を取容るるは、在來の意味に於ける主觀的價値を認むることゝ幾何の差もない。Schätzung の對象たることゝは如何の關係に立つか。リ氏の駁論には未だ充分の推服すべき理由を見出し得ない。

又貨幣の價値若くは購買力の騰貴下落ありと云ふが爲めには、總ての價格の騰貴下落、總ての人々の所得の增減が存せねばならぬ。然るに之等は異りて變動すべくして、一般的に變動しない。多數の價格騰貴すれば確かに多數の財に對する貨幣個片の購買力は下落する、然しそは總ての財に對してゞはない。多數の人々に對して下落するも總ての人々に對してゞはない。單に多數の價格の騰貴下落、多數の人の所得の增減あるに由つて、一般的なるかの如き立言をなすも、そは淺薄なる平均的判斷に外ならずと云ふ。寔に然り、嚴格に云ふ時は其言の如く

なければならぬ。然ながら若し斯の如き見解を推進むるとせんか、總ての統計的研究は不可能とならざるか。複雜なる社會現象の同一方向に同一程度に變動するものは稀なるべく、此場合大量觀察の方法に依て複雜の中に單純を求め、一般的傾向を知るに滿足する。而して是れ今日の社會科學に於て諸種の方面に許されたる所である。

貨幣の側より起る物價變動の原因として、之れ迄最も重要なる問題として取扱はれ來れるものは、貨幣の數量であつて所謂貨幣數量說の發展となり、之に絡はる種々の議論を生むで來た。固より玆には其內容の發展や諸多の批評に說及ぶの遑なく、唯リーフマンの說と如何に相交涉するやを論ずることに限定せねばならぬ。

云ふ迄もなく貨幣數量說の要旨は貨幣の數量は物價に比例することを主張するにあり、之に最も明快なる表示を與へたるフイツシアの說も、要するに以上の說を公式化し、之を一般に知られたる交換方程式 $T=MV+M'V'$ の形に表はせるに外ならぬ。之に依れば物價若しくは貨幣の購買力は、貨幣及預金通貨の數量、兩者の流通速度及取引量の五原因の複合せる結果であつて、他の諸原因は唯以上を通じて間接に作用するに過ぎずと見る。數量說に對しては熱心なる支持者多きと共に、又有力なる反對者も尠からず。リーフマンの駁論も熱烈を極めたるものなるが、其の數量說の根本的誤謬として指摘せる所を要言すれば次のやうである。一、財の量と貨幣額とを對立せしむるは全然客觀的、唯物的なる觀察方法にして誤つてをる。經濟從つて交換取引に於て問題となるは、財の量にあらずして欲望の充足である。從つて貨幣に對立せしむべきものは欲望であつて財の量ではない。總ての經濟的過程の根底をなすものは個人的欲望であつて、之を離れて交換經濟的過程は說明し得べくもない。二、此

說の有つ傳統的なる價値概念は誤つてをる。即ち財の價値は客觀的に表示し得るとなし、價格を以て價値の客觀的表示なりとする。三、交換せらるゝ財の量と貨幣の額とは等價なりとする誤れる見地に立つてをる。何れの交換に於ても收益を得んことを目的とするものであつて、得るところは與ふるものより高く評價せられる、と云ふにある。

一の論難は從來の學說を以て唯物的財學說なりとするより起るものであつて、論議の岐るゝ所は根本の立場にある。經濟現象の總てに就て心理的なるものをのみ取上ぐることが、諸問題を解明するに適するや否やが先づ問はれねばならぬ。二に就ては以上既に之に關說した。而して三の論難に至りては、主觀的評價の客觀的表示可能ならずとするものにあつては、起來るを當然とする。數量說に於ける如く之を可能なりと觀るとき　而して行はれたる交換の外形的結果を觀、貨幣量と價格とに着目して對立せしめ得るものとなる、此場合問題となれるものがリーフマンの考ふるが如き主觀的評價ならざるは言ふ迄もない。數量說の以上の立場を許すとき、一經濟社會に於て或期間の取引總額が、實際交換に用ゐられたる貨幣及其代用物の數量及速度(之等は實際に捕捉し難きは論を俟たぬ)と對立せしめ得るは否定すべからず。實際行はれたる取引の總體の表示として斯かる方程式を立て得ることゝなる。然ながら予も數量說に左袒する者ではない。之に依りて明にされ得るは、交換取引の事後の計算に過ぎずして其說明ではない。如何にして物價が定まるやを一歩も踏入つて說明するものではない。其所謂五個の要素に至りては何れも之を獨立的に決定するの方法がない。」

貨幣數量說を以て其まゝ物價決定原理として取るべきにあらざれど、全然何等の價値なしとも考ふるを得ない。即ち貨幣數量の增減は自働的に物價に影響を及ぼすものと觀る可らず、數量說の說くが如き程度に於て物價に影響せざれども、全然無關係には立ち能はぬ。凡そ貨幣及貨幣代用物の數量多きことは、或人々の所有する數量大なることを意味する。其は現實に交換に使用せられたるものなるを要せず、使用せらるべき可能性を有つ數量にても可なり。各人の所有する數量大なるに從ひて、其特定部分に對し各人の認むる主觀的價値、即ち尊重の程度は小ならざるを得ない。仝じく十圓の金額に對しても、之に對する主觀的價値は百圓を所有する場合と千圓を所有する場合とに依り異らざるを得ぬ。斯くの如き事實は日常生活の有らゆる方面に經驗する所であつて、之を一般的に云表はして、特定部分量の有つところの意義は全體量の大なるに從ひて小なりてふ、所謂部分對全體相對性の法則の一面の現れと觀るを得べく、或は又ヴントに從つて意識狀態相對性の法則に當嵌めて說明するも可い。此特定の部分量に對する主觀的價値小なることは、換言すれば交換上特定の貨幣量よりも、之に對立せられ之に結付らるゝ各種の財をより多く尊重することを意味し、同一の財の爲めにもより多くの貨幣量を支拂ふを厭はざることを意味する。此意味に於て又此程度に於て、貨幣の數量は其價値若くは物價に影響する。

リーフマンは貨幣の增加は自動的に諸價格の騰貴を來さず、所得の急激なる人爲的增加を通じてのみ影響すると云ふ。而して其謂ふ所の所得とは消費資金即ち消費目的の爲めに使用處分し得る貨幣量を指すが故に、貨幣を以て一個の Idee たり Abstraktum たるに過ぎずとすると、現實の支拂手段を指すとの立場の相違はあれど、

一度此關門を通過すれば使用處分し得る資金の量を捕へたる點に於ては一つである。價格に及ぼす影響は本來は財を通じ、需要の側より起ると云へることも、一見貨幣により生ずる影響とは相關せざるやの感あれども、其は消費資金を通じて現はるとせることゝ截離ち難い。蓋し消費資金は先づ需要となりて交換に現はれ、價格に影響すべきが故である。

上述の根據に立ちてリーフマンは貨幣發行政策に論及し、貨幣の增加は交換取引の擴張及び其より起來る所得及收益の增加と關聯すること直接なるに從ひ、その危險少く、人爲的附加的に所得を增加する場合諸價格の騰貴を招來すること著しと云ふ。此見地よりして預金高に基き、商品手形に基く紙幣發行は危險少くして、融通手形に基く發行は諸價格に影響すること著しとする。茲に注意す可きことは、交換取引の擴張及所得の增加と關聯せしむべしと云ふは、其等の事項に追從せしむるを必要とするの意なるか、其等に先行するも可なるの意なるか。凡そ事業經營に資金を必要とするは、既に行はれたる取引に關聯して生ずることあり、又或は將來行はれんとする取引に關聯して生ずることあり。經濟生活の發展の爲めには等く兩者を必要とするものであつて、特に事業の新たなる發達の爲めには後者を缺ぐことを得ぬ。故に若し貨幣の增加は常に交換取引の擴張に追從せしむべしとするにあらば、その重要なるべき半面を看過するを否定し難い。

以上の事實は貨幣發行に關してなると共に、銀行の信用許與に就ても全樣である。リ氏も當座貸附、手形引受等の場合を擧げて Kreditinflation の影響を示したれども、其は何れの方法に依るを問はない、凡て銀行は信用

の許與によりて資金を創設すること、紙幣の發行と擇ぶ所はない。銀行は或程度の支拂準備を手許に置くことに依りて、之に幾倍する信用を許し以て資金を創設するを得べく、此資金は貨幣と全じく市場に作用する。

貨幣の本質を如何に觀るかは固より重大なる立場の相違である。今若し假にこの點を別にして考ふれば、所得を通じてのみ諸價格の變動に作用すと云ふことは、資金の增減によりて、使用處分し得る貨幣所有高の增減によりて高低すと云ふと一に歸する。柄鑿相容れざるかに見ゆるリーフマンの說と貨幣數量說的見解とが、尙一脈の相通ふものがあり、予の豫てより貨幣數量說に對して抱懷する所の考が、リーフマンの所說と如何に交涉するかを惟ひて甚だ興深きを覺えざるを得ない。(高垣寅次郎)

高垣寅次郎
小畑茂夫